

新蔵生田文庫所蔵『大西閑雪会員名簿』について

閑屋 俊彦

はじめに

筆者は『新蔵生田文庫蔵書目録并解題』として平成二十一年六月二十五日に平成十八年度～二十年度科学研究費補助金基盤研究（C）の成果報告書を出したことがある。関西大学図書館に生田秀昭氏から新たに寄贈されたものをまとめたものである。簡易な冊子ではあるが、主要な機関には送つてあるので、それを参照されたい（以下、「成果報告書」と略称）。いきさつについては拙著『続狂言史の基礎的研究』（平成二十七年三月・関西大学出版部）にも記してある。秀昭氏の曾祖父・秀（明治三十九年五十一歳没）が現在のアサヒビル發展に多大な貢献をした経済人であったとともに自宅に茶室兼能舞台を持っていた文化人であり、関西大学が新制大学になった時、御子孫が大量の蔵

書を図書館に寄贈した関大にとって恩人であることを述べた。

生田秀は能を観世流の大西閑雪（大正五年七十六歳没）に習ったのだが、「成果報告書」の中には「史料の部」122として紹介した『大西閑雪中名簿その他』がある。それは、生田秀と大西閑雪とのかかわりを知る以上に明治半ばという大阪での能楽復興期における人間関係がわかる重要な資料と思えるので、今回ここに紹介する次第である。なお、本書は別に表紙外題があるものでもなく、最初は仮に「大西閑雪中名簿その他」とした。しかし、中間には名簿とかわりのない曲名列挙があり、大西家に伝わり閑雪その人が関与した訳でもないもので、これも仮題ながら「大西閑雪会員名簿」と改めた。以下「名簿」と略称する。また、「名簿」には、閑雪の前名「鑑一郎」も使っているが、明治三十三年に観世清廉から免許皆伝、雪号を贈られ「閑

「雪」を名乗り、それで通っているので統一した。

第一章 資料紹介

まずは当該資料の紹介と翻刻を試みてみる。

【書誌】

縦七十八×横百五十八ミリ。袋綴一冊。茶色表紙。題簽なし。
墨付（朱入）二十三丁。遊紙前一丁、後七十六丁。「堂（井上）
製」の赤罫紙が用いられている。（請求記号LI*773.7*122）

【翻刻凡例】

一、氏名は旧漢字も使用したが、住所については新字体に直し
たものもある。

一、ミセケチについては採用しなかったが、残しておきたいと
判断される氏名については取り消し線で示した。

一、住所については、何行にもわたって書いたものや、のちに
補った箇所もあるので、わかりやすいように書き改めた。

また、一字分の空白を設けて読みやすいようにした。

一、中間に曲名をイロハ順に並べ、「井筒 内三二」のように検索
に便利なようにしてあるが、ここでは省略した。

一、丁数は省いた。

【翻刻】

東区高麗橋五丁目

北区曾根崎中二丁目

北区曾根崎

電話東 三三一〇番 小宮山

東区平野町壱丁目板屋橋筋北へ入西端

西区土佐堀裏町

東区今橋壱丁目板屋橋筋北へ入

東区北久太郎町三休橋筋北へ入東端

西区西横堀新渡辺橋西詰壱丁目西ノ辻西へ入

北側路次 阿波座下通壱丁目十五番邸

西区三軒屋上ノ町百拾七番邸

摂州川辺伊丹町本町愛宕前

神戸市戸場町十五番邸

三十七年十月

大西閑雪翁

社中 拔萃

大西鑑一郎

大西亮太郎

大槻富太郎

森田操

高嶋新之助

荒木宗兵衛

大畠操

佐々木筹之助

谷 市之進

橋本熊三郎

伊藤保

石川市之丞

池田虎一郎

瓢月会
麦

東区農人橋町老丁目廿三番屋敷

鞍馬会

電話 東三一〇一番

今岡義方

入江鷹之助

長谷川廷

原 虎彦

堀部郁次郎

豊嶋住作

小塚正一郎

大嶋

織部伊助

大沢庄兵衛

神谷邦助

加嶋一信歳

菱町

笠井又四郎

武内常太郎

高山圭三

岡橋恒三

土屋尅助

辻 善次郎

瓢鞍交

交

麦

時習会

鞍

瓢・鞍・交・時

長尾藤三

長尾宗次郎

中崎音次郎

村田善次

久保盛明

安田竹葉

安田龜次郎

安田芳一

山本新吉

山添昌

松尾新八

松本寅吉

前川通流

牧 鶴城

藤本一二

福田宗英

藤井徳兵衛

小山九郎次郎

田 艇

桃谷

市内北野兎我野町七七七

浅田柳之助

京都市上京区若王子境内川越方

生田耕一

東路

神戸市生田町貳丁目一ノ一

武井衛雄

鞍

秋馬新三郎

神戸町中山手通三丁目八拾壹番ヲールセン方

桑田量平

荒川重秀

大阪西成郡鷺洲村海老江

溝口恒輔

赤松美矩

京都市室町上ル長府町

島 芳藏

足立住三

京都市銀閣町隣

島 文次郎

安宅章三

京都市本郷区湯嶋新花町四三番地

安達讚弥

荒堀萬次郎

大阪市南区高津九番町一五

小林龜松

北村鏡太郎

天満樋ノ上町難波橋東へ入南端

松本安吉

菊田藤七

京都市本郷区湯嶋三組町五十八番地

高田楨蔵

衣笠幸栄

廣嶋市鶴見橋東詰上ル東端 江川(米商)方

武井トミ

木下義一

(曲名イロハ順省略)

鹿田静七

明治三十七年十月現在 瓢月會員宿所姓名

住友吉左工門

重岡寅之助

大阪市南区鰻谷東ノ町 三十七年四月退会

伊庭貞剛

平賀敏

同南区塩町壹丁目

植田五郎

日比孝一

東区谷町四丁目和泉町南へ入

可児弥太郎

樋口三郎兵衛

大阪市東区石町壹丁目

田邊貞吉

千葉

区嶋町貳丁目

永田仁助

荒木寅三郎

高津四番町

内安

兵庫県武庫郡魚崎村 植田宗左工門方

〃 〃 南区北桃谷町

京都市上京区寺町通 今出川北へ入 西側

〃 〃 〃

堂島町南入東

田 艇吉

南区北桃谷町

高山圭三

〃 〃 東区高麗橋式丁目

芦田順三郎

同

田 艇吉

〃 〃 伏見町壹丁目

辻 忠右工門

同

北村鏡太郎

〃 〃 北新町壹丁目

池田經三郎

同

久保盛明

〃 〃 今橋三丁目

生田秀

東区今橋三丁目三九

生田秀

〃 〃 南区北桃谷町三六番

高山圭三

南区天王寺五二九八番地

岡 素男

〃 〃 南区天王寺石ヶ辻町五二九八

岡 素男

旧梅屋敷北横町二丁東

岡 素男

大阪市北区櫻ノ宮堤

井上保次郎

東区参左町角

長尾藤三

〃 〃 南区北桃谷町

北村鏡太郎

以上三十八年二月現在

平賀敏

〃 〃 東区高麗橋三丁目

平賀敏

外二申込中

平賀敏

〃 〃 道修町五丁目

樋口三郎兵衛

東区高麗橋三丁目

岡橋恒三

〃 〃 東区谷町糸屋町角

長尾藤三

東区平野橋東詰

樋口三郎兵衛

〃 〃 北濱三丁目

福井菊三郎

〃 道修町五丁目

曾根高祥

〃 〃 和泉町

鴻池新十郎

東区谷町式丁目三二番地宗弓町

曾根高祥

神戸市北野町二丁目参拾番地 前へ転屋

長谷川廷

前人宿所

交誼會員名簿

三十八年以降六月調

東区塩町一丁目

伊庭貞剛

後志国余市郡余市町大字津町

若林栄蔵

神戸市中山手通六丁目七二

長谷川廷

出征第二師团后備歩兵

東区農人橋壹丁目二三

豊嶋住作

第三十聯隊第四中隊

生田金治

同嶋町壹丁目

田辺貞吉

北海道余市郡余市町

大字大川町百八十八番地
北海道小樽区入船町畑七

金子苑志

田中理吉

同 まつ

横浜市西戸部町七二二番地

二安裕造

三十八年十一月調

北区老松町三丁目百六拾七番現處

牧野裏一

青柳儀作

西区江戸堀北通壺丁目

河前善益

内本町善庵筋東入南端

土屋元作

神戸市北野町三丁目十番地

青柳正好

38年6月

東京市芝区白金臺町一丁目二十七番地

須田信次

38年28/6

東京市小石川区北日向臺町二丁目一番地

柴田承桂

大阪市西区土佐堀越中橋南詰玉桜方

玉手菊洲

東京市京橋区木挽町一丁目二番地

名波小六

大阪市南区天王寺南河堀 八木氏方

山本五郎

38年24/12

岡山市下西川町四十四番地 高原益太郎方

時岡東作

第二章 考察

書写年代

書写年代であるが、本書で年号が記される上限は三十七年十月で、下限は一人だけが三十八年十二月二十四日となっている。すなわち明治三十七年（一九〇四）から三十八年にかけて書かれたことがわかる。当時、大西閑雪は六十四・五歳、生田秀は四十九から五十歳になったころのことである。ちなみに秀は明治三十九年に五十一歳の若さでなくなっている。晩年といつていい年齢である。

筆写者と生田耕一の編集

「名簿」には生田家にかかわる三人の名前すなわち金治・秀・耕一の名前が見られる。

まず、生田金治は「出征第二師団后備歩兵 第三十聯隊第四中隊」とする。秀の曾孫にあたる生田秀昭氏の御教示によると金治は秀の妹ゆうの養子鈴木金治で六代目三折を名乗り、明治三十七年四月十五日没という。すなわち、名簿記載中になく

っているのだが、まさに日露戦争（明治三十七―三十八年）の真つただ中である。

又、木下義一は秀の長女・悦の夫で、木下家は吹田の名家、義一はアサヒビール吹田工場の幹部職員だったようである。更に武井トミは秀の次女の富で、武井衛雄に嫁いたが、衛雄は明治四十三年に三十八歳でなくなり、富は吹田に戻った可能性が高いとの指摘である、すなわち、武井トミの名で『大阪人名録』に「三島郡吹田町」とある。

生田秀の名前は「瓢月会」と「交誼会」に記されていて住所をまとめれば「大阪市東区高麗橋二丁目 今橋三丁目三九」となる。詳しくは「成果報告書」を参観願いたい。

生田耕一の住所は「兵庫県武庫郡魚崎村 植田宗左工門方」をミセケチとし「京都市上京区若王子境内川越方」となっている。丁度、このころ引越したようである。秀昭氏によると明治十五年十一月十五日生まれ（没年は明治三十七年四月十五日）ということなので、当時二十一・三歳ということになる。耕一は和歌を好み、『万葉集』や小鼓の研究をすることになるのだが、それらは大正期になってからのことである。このころは秀の手伝いをしていただろうことは充分に考えられる。父秀は翌明治三十九年三月二十六日に大日本麦酒株式会社が設立した

時に取締役になるという多忙を極めた時期なので、前の住所がミセケチになっていることといい、この名簿は秀の命により耕一がまとめたものであろうと考えておきたい。すなわち、名簿で年号が記載されているのを見れば、明治三十七年十月に大西閑雪を始めとした能楽師を中心とした名簿をまとめ、同年十一（老とも読めるが、順序としては十一であろう）月に瓢月会員名簿が加えられ、翌三十八年六月に外地を含めた遠方の所在者を書き加え、更に新規加入の会員を同年十二月二十四日に記入したということになる。

ざっと見て、当時の著名な経済人が名前を連ねていることからして、大西閑雪よりも生田秀が中心となって呼びかけた人脈図の観を呈しているといえるのではないだろうか。そして、それがはからずも明治中期の能楽を支えていたパトロン達、庇護者が有力大名から経済人に替わっていった結構早い時期の会員名簿という点で貴重な資料となっているに違いない。なお、会の名称については「交誼会」「瓢月会」「鞍馬会」「時習会」「麦」と四か所の会の名前がわかる。

第三章 五十音順人名略解説

名簿では能楽師や瓢月会については、ほぼまとめようとして書こうとしているようだが、大部分については、未整理の状態であり口ハ順の意識があるようである。また、重複する場合も多い。ここでは、索引の便宜も考慮して生田一族の者は除き五十音順にしてみた。以下の人名考察にあたっては断らない限り、能楽師は『能楽大事典』（筑摩書房）、大阪の主要な人物については三善貞司『大阪人物辞典』（清文堂出版）によったが、そのほかについては主として国立国会図書館で「近代デジタルライブラリー」としてインターネット公開している『日本紳士録』で名簿の年代に近い第九版（明治三十六年）によった。住所の誤記も改めてある。又、名簿と異なる場合は（ ）に入れた。

青柳正好 〓 神戸市北野町住。

青柳儀作 〓 未詳。

赤松美矩 〓 未詳。

秋馬新三郎 〓 酒類商。大阪市東区住。

浅田柳之助 〓 大阪市東区住。

芦田順三郎 〓 大阪市東区住。

東田艇吉 〓 大阪市堂島町住。

安宅章三 〓 未詳。

足立住三 〓 未詳。

安達讚弥 〓 東京市本郷区住。

荒川重秀 〓 大阪地方海員審判所所長。大阪市東区住。

荒木宗兵衛 〓 未詳。

荒木寅三郎 〓 書簡（「成果報告書」参照）によれば京都府下賀

茂住のち学習院長となり目白の学習院内に住む。寅三郎からの封書が十五通、別に号「鳳岡」で卷子仕立てにした書簡、さらには妻らしい歎子からの八通教えられ、大変親しい間柄であったことが伺える。

荒堀萬次郎 〓 荒堀源次郎カ。フランネル商。大阪市東区住。

池田経三郎 〓 慶応三年（一八六七）〜大正十二年（一九二三）。

銀行家。大阪近江銀行頭取。

池田虎一郎 〓 大阪電燈会社員。大阪市西区住。

石川市之丞 〓 未詳。

伊藤保 〓 未詳。

井上安次郎 〓 文久三年（一八六三）〜明治四十三年（一九一〇）。実業家。第百三十六銀行設立後、東洋製紙会社設立。名簿に使用された野紙は「堂（井上）製」と印刷されているので、製紙会社を設立した井上からのものでないだろうか。

伊庭貞剛 弘化四年（一八四七）〜大正十五年（一九二六）。

住友家総理事。大阪紡績・大阪商船会社設立。

今岡義方 執達吏。大阪市西区住。

入江鷹之助 弁護士。大阪市東区住。

植田五郎 大阪市東区住。

内安 大阪市南区住。

大沢庄兵衛 未詳。

大槻富太郎（文雪） 観世流シテ方。嘉永六年（一八五三）

昭和五年（一九三〇）。当時五十一歳。木綿問屋の丹波屋七兵衛の次男で大槻家の養子となった。明治二十七年（一八九四）に職分となる。現在の大槻家の祖である。

大西鑑一郎（閑雪） 観世流シテ方。天保十一年（一八四〇）

〜大正五年（一九一六）。四世大西新右衛門の次男。小林責ほか

編『能楽大事典』（筑摩書房）等によれば、『還暦（筆者注明治

三十三年）に際し帰阪、同年二三世観世清廉より皆伝免許を受

け雪号を贈られて閑雪を名のり」とあるので、名簿作成時には

「大西閑雪」で通っていたと思われる。三十七年十月の箇所には

閑雪名を使っているものの住所録としては鑑一郎のままである。

ちなみに雪号贈与は先年なくなられた片山幽雪で知られている。

名簿に住所が二か所記されているのは、このころ東区高麗橋か

ら甥の亮太郎のもとに移ったことによるものである。

大西（手塚）亮太郎 観世流シテ方。慶応二年（一八六六）

昭和六年（一九三一）。閑雪の甥。当時三十八歳。母が離婚し、

大西家へ帰ったので大西姓を名乗る。閑雪から芸の手ほどきを

受けたが、晩年は不和で大正十三年（一九二四）に手塚姓に復

帰。当時日本一といわれた大阪能楽殿を建設。平成二十五年三

月に関西大学で行われた「能楽フォーラム」で特集を組み、図

面は手塚稔子氏によって大阪歴史博物館に寄贈された。

大島操 未詳。

岡 素男 大阪市南区住。

岡橋恒三 大阪市東区住。

織部伊助 未詳。

笠井又四郎 未詳。

加島一信歳 未詳。

可児弥太郎 大阪市東区住。

金子苑志 大字大川町住。生田家と親しかった吹田の名家が

金子家であったが不明。

神谷邦助 未詳。

河前善益 大阪市西区住。

菊田藤七 醤油商。大阪市東区住。

北村鏡太郎 大阪セメント会社社長。大阪市南区住。

衣笠幸栄 衣笠船燈会社担当社員。大阪市北区住。

久保盛明 会社員。大阪市南区住。

桑田量平 未詳。

鴻池新十郎 明治四年（一八七二）～昭和四年（一九二九）。

当時三十三歳。十代目鴻池善右衛門の次男で鴻池財閥総裁。住

所の和泉町は鴻池家のあったところ。

小塚正一郎 北浜銀行支配人。大阪市東区住。

小林亀松 大阪市南区住。

小山九郎次郎 未詳。

佐々木筹之助 未詳。

鹿田静七 古書肆。弘化三年（一八四六）～明治三十八年（一九〇五）。当時五十九歳。『鹿田松雲堂五代のあゆみ』（和泉書

院）により三代が襲名したのは明治三十八年九月のことなので

二代松雲堂と判断した。「明治三十六年及び三十七年、古書の重

要性を広く啓蒙するため、「大阪史談会」「保古会」を創立し、

「大阪中之島図書館竣工（三十七年）にあたり、その記念として

（中略）「正平版論語集解」を寄付」するなどし、「鹿田松雲堂の

二階は顧客の文化人サロンの観を呈し」といたという。内藤湖

南・富岡鉄斎・平瀬露香・長尾雨山などであるが、それが閑雪

会員名簿にもつながっているように思える。

重岡寅之助 銀行員。大阪市東区住。

柴田承桂 著述業。東京市小石川区（牛込区）住。

島 文蔵 京都市住。

島 芳蔵 京都市在。

須田信次 商会員。東京市芝区住。

住友吉左衛門 財界人。元治元年（一八六五）～大正十五年

（一九二六）。当時三十九歳。徳大寺公純の子で住友家十五代目

友純のこと。明治二十八年、住友銀行を創設。中之島図書館の

建物を寄付し、大茶人でもあった。明治三十七年四月退会。

曾根高祥 大阪市東区住。

高嶋新之助 未詳。

高田植蔵 高田商会主・貿易商。東京市本郷区住。「成果報告

書」で紹介した書簡に昭和五年六月七日付だが一通のみある。

住所は「相州大磯字菊屋町別荘」となっており、療養中である

由の内容でもある。

高山圭三 三井呉服店支店長。大阪市南区在。

武内常太郎 未詳。

田中理吉・同まつ 北海道小樽区住。

田辺貞吉 弘化四年（一八四七）～大正十五年（一九二六）。

実業家。東京府師範学校長を経て住友銀行支配人。帝国人絹等多数の重役。

谷市之進 〓 大倉流大鼓方。? 〓 大正九年(一九二〇)。「囃子方の四天王」の一人。

玉手菊洲 〓 天保四年(一八三三) 〓 大正三年(一九一四)。当時六十八歳。画家であつた玉手棠洲に師事。雑誌『能楽』の裏表紙に連載されたことで知られる。

辻 善次郎 〓 未詳。

辻 忠右衛門 〓 文化七年(二八一〇) 〓 明治十九年(一八八六)。実業家。両替商天王寺屋四代忠兵衛の弟。大阪通商会社設立。茶道・謡曲が趣味。自安斎と称す。

土屋耆助 〓 未詳。

土屋元作 〓 大阪市内本町住。

田 艇吉 〓 大阪市南区住。

時岡東作 〓 岡山市西川町住。

豊島住作 〓 会社員。大阪市東区在。

中崎音次郎 〓 未詳。

長尾宗次郎 〓 未詳。

長尾藤三 〓 大阪国文社長。大阪市東区。『大阪人物録』に「大阪曹達(株)代表取締役」。

永田仁助 〓 文久三年(一八六三) 〓 昭和二年(一九二七)。実業家。大阪電燈会社監査役。貴族院議員。懷徳堂記念理事長。観能と茶を嗜む。

名波小六 〓 洋服商。東京市京橋区住。

橋本熊三郎 〓 金春流太鼓方。弘化三年(一八四六) 〓 明治三十八年(一九〇五)。当時五十八歳。名簿記載の一年後なくなつていたので最晩年ということになる。「囃子方の四天王」の一人。

長谷川廷 〓 官吏。大阪市東区在。

原虎彦 〓 未詳。

樋口三郎兵衛 〓 文久三年(一八六三) 〓 昭和八年(一九三三)。

浪華画学校創設者。仕舞を大西閑雪に、鼓を谷市之進に学び、中原山二郎の名で舞台上に立つ。茶道は表千家の皆伝で立々斎不文と称した。

日比孝一 〓 未詳。

平賀敏 〓 安政六年(一八五九) 〓 昭和六年(一九三二)。三井銀行大阪支店長から箕面・有馬電鉄(阪急)社長。日本で初めてシャンペンサイダーを売り出す。

福井菊三郎 〓 大阪市北滨住。

福田宗英 〓 未詳。

藤井徳兵衛 〓 未詳。

藤本一二〇日本火災保險会社社長。大阪市北区住。

二安裕造〇横浜市西戸部町住。

堀部郁次郎〇未詳

前川通流〇未詳。

牧 鶴城〇未詳。

牧野裏一〇大阪市北区住。のちの大阪能楽観賞会の後援者で

もあつた牧野建設とかかわると思つてゐるのだが。

松尾新〇未詳。

松本寅吉〇未詳。

松本安吉〇大阪市天満住。

溝口恒輔〇会社員。大阪市東区。

村田善次〇未詳。

森田操〇森田流笛方。弘化三年（一八四六）〜大正十一年（一

九二二）。当時五十八歳。森田（旧姓野口）柵内の長男。名簿の

谷市之進・橋本熊三郎そして糟谷彦三郎とともに「囃子方の四

天王」と称された。『千野の摘み草―森田操遺稿集』は逸話集

として著名。

安田亀次郎〇安田亀太郎カ。大阪市西区。

安田芳一〇未詳。

山添昌〇未詳。

山本五郎〇大阪市南区住。

山本新吉〇未詳。

若林栄蔵〇後志国（北海道）余市郡住。

第四章 時代考察と名簿書写の意義

未詳の人物名を多く残したのは筆写の不明とするところであるが、それにしても財閥を含めた財界人の名が連ねられているのが目を引く。大阪にはなじみの深い住友家からは十五代目住友吉左衛門と総理事の伊庭貞剛・住友銀行支配人田辺貞吉、そして鴻池財閥総裁の鴻池新十郎を始めとして、第三百三十六銀行の設立者井上安次郎・大阪セメント会社社長北村鏡太郎・大阪通商会社設立辻忠右衛門・箕面有馬電鉄社長平賀敏・日本火災保險会社社長藤本一二等々の名前が並ぶ。まさに大阪経済界を代表する人物が揃つた。彼らはやはり実業家であつた生田秀の人脈につながるのではなからうか。それに続き大阪地方海員審判所所長荒川重秀・弁護士入江鷹之助に古書肆鹿田静七のちの学習院長荒木寅三郎や画家玉手菊洲等々がサポートしている。一大プロジェクトチームといつてよい。

ところで、この名簿が出来た明治三十七・八年は大阪の能楽

はどのような時代であったかという悲慘なものであった。拙著『続狂言史の基礎的研究』の「新世紀へ続く」世阿弥以来の盛況」に再録し、「明治三十年代」を振り返ったことではあるが、全国最大といわれた大阪能楽殿はまだなく（大正八年設立）、大阪博物館が唯一の能舞台といってもよかつた。それも動物園の隣で見所は吹きさらし、東京発の『国民新聞』には「大阪は能楽謡曲に於ては不向きな土地」と酷評される時代であつた。

一方で明治三十七年二月に日露戦争が勃発し、各地で軍資獻金能が盛んに行なわれていた。倉田善弘氏編『明治の能楽』（日本芸術文化振興会）によれば大阪でも三月二十日に博物館で大西閑雪はかの出演で演能されている。名簿はまさにそのような時代を背景として、能楽に素養のある生田秀が音頭をとつて大西閑雪を応援すべく大阪の財界人を中心に呼びかけたものではないか。能楽会員名簿としても極めて珍しいものであるに違いない。

おわりに

以上、新蔵生田文庫本の「大西閑雪会員名簿」について紹介し、若干の解説を試みてみた。

その結果、名簿は明治三十七年から三十八年にかけて生田秀が耕一に任せて作成させたもので、日露戦争の最中であつた。当時、大阪には東京の新聞から擲揄されるほどろくな能楽堂がなかつた。明治三十九年に大日本麦酒株式会社の取締役に就任することになる秀は能楽に堪能であつた利点をも生かし、大阪周辺の財界人に呼びかけ、大阪を活性化するためプロジェクトチームを立ち上げた。はからずも名簿は能楽のバトロンが有力大名から経済人に替わつていったことを示す初期の例にもなっている。以上のような筋書きも書けるのではなからうか。

忽々たる大阪の経済人たちの能楽趣味を汲み上げることにはかなりできたと思つているが、名簿には未詳とせざるをえない人物も多い。筆者の不明もあるので、御存知の方がいらつしやれば是非御教示願いたい。恐らくその後の大阪空襲などでなくなつた方も大勢含まれているのではないだろうか。その意味でも大切な記録となつている。また、実は依然として現在の大西家に何う機会を設けていない。大西家は大阪の御三家といわれるが、閑雪以来いやそれ以前の江戸時代からの老舗中の老舗なのである。今回をきっかけに大西家を訪問することをお許し願いたいと思う。

（せきや としひこ／本学教授）